

「神がなさること」

使徒行伝 11章 1節～18節

説 教 本庄侑子牧師

「わたしのような者が、どうして神を妨げることができようか。」(使徒行伝11章17節)教会が直面した歴史の転換点で、ペテロの口に乗った言葉です。

この時、教会に前例のない出来事が起こりました。異邦人が洗礼を受けて教会に加えられたのです。この出来事をきっかけに、教会は異邦人伝道へと大きく踏み出していくこととなりました。

この時、教会は喜びよりは動揺しました。前例のないことを教会としてどう受け止めたらいいのか分からなかったのだと思います。異邦人に洗礼を受けたペテロはとがめられました。異邦人が教会に加わるということは、異邦人と一緒に食事をするようになることも意味したからです。ユダヤ人の食物規定によれば、あってはならないことでした。

ペテロは事の次第を説明します。私だって異邦人と食事をするなどあってはならないと思っていた。この私が一番このような自分に驚いている。しかし、私の考えを変えてこの事をなされたのは主なる神なんだ、と。当事者となったペテロには、そこにしか理由がなかったのです。

遠くに住んでいる異邦人コルネリオを訪ねる理由などなかったペテロが、なぜ訪ねたのか。幻を通して主なる神の語りかけを聞いたからです。神が徹底的にペテロの考えに立ち向かってこられたのです。一体これはどういうことかと考えあぐねていた時、ペテロを異邦人たちが訪ねてきました。聖霊に押し出されるようにして、ペテロはすぐさま出かけて行きました。

時を同じくして、コルネリオも主なる神から働きかけられていました。異邦人ながら旧約聖書を読み、敬虔に生きようとしていた人です。ペテロを家に呼び寄せて話を聞くことは、本当ならありえないことでした。ペテロはユダヤ社会で汚れていると考えられていた皮なめし職人の客になっていたからです。コルネリオもペテロと同じでした。抗えない神の促しがあったのです。

主はペテロに幻を通して語りかけただけでは

なく、コルネリオにも語りかけておられました。家に着くとコルネリオが自分の前にひれ伏して来て、あなたを待っていたというのです。ペテロは震えたことでしょう。神に促されて旅に出たは良いが、本当に異邦人の家に行って良いのだろうか。何度も不安になったと思います。しかし、辿り着いた先でコルネリオが待っていたのです。ペテロは確信したことでしょう。ああ神様なんだ、と。コルネリオは親族や友人たちと一緒に、ペテロの口からイエス・キリストの福音を聞き、皆で洗礼を受けることとなりました。

ペテロはこう締めくくります。「わたしのような者が、どうして神を妨げることができようか。」ペテロをとがめた人々も黙ってしまいました。神がなさったことを前にして、教会全体が言葉を失い、ただただ神を賛美しました。

この出来事は、そこに巻き込まれた人たちにとっては確かに想定外の出来事でした。しかし、イエス様にとっては初めからの計画でした(使徒行伝11章8節参照)。イエス様は使徒たちの視野を超えて、もっともっと先を見ておられました。地の果てにいる一人一人にまで福音を届けるために、力強く働かれました。聖霊は、少しずつ彼らの目を開き、イエス様の言葉の意味を悟らせ、今回の出来事を受け取らせてくださいました。聖霊の力によって進んでいる、神の計画がそこにあったのです。

教会の歩みには、人間の計画になかったことがやってきます。教会の頭なるイエス様は、私たちの誰よりも先を見通して進んで行かれます。動揺して、思わずペテロをとがめた人たちのように、当初は戸惑い、引き止めようとしながらも、最終的にはその考えが打ち砕かれ、事を起こされた神様の前に静まって、ただただ神様を賛美せざるを得なくなります。

「わたしのような者が、どうして神を妨げることができようか。」教会はそう声を揃えて新しくされ、新しくされた自分たちを通して、神のみわざが力強く進んでいくのを共に経験して行くこととなるのです。

(記 説教要約奉仕者)